

埋蔵文化財調査センター企画  
令和7年度 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 第3回展示

# ことば デザイン 文字と文様 & 令和6年度再整理事業成果展

## みどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査をおこない、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として刊行しています。その成果には、ふるさと福井の歴史を語る出土品が数多く含まれています。

今回は、過去数千年にわたる歴史のなかで刻まれた文字(ことば)や文様(デザイン)の様相や移り変わりに焦点を当て、企画展を開催します。

あわせて、昨年度より文化庁の国庫補助を受けて進めている、センターが所蔵する出土遺物の再整理事業の成果について取り上げます。今回は令和6年度の成果として、整理が終了した遺跡のうち、2遺跡の出土遺物について公開します。

これから、展示のみどころをご紹介いたします。

### ① 古墳時代の直弧文

弥生時代から古墳時代にかけて、物に刻まれた文様は、そこに込められた意味とともに徐々に変化しながら受け継がれていきます。

弥生時代後期には、弧帯文と呼ばれる弧と直線で表現された文様が吉備地方から生まれました。福井県では、糞置遺跡(福井市)から弧帯文が描かれた弧文板が出土しています。のちに、この弧帯文から派生して鍵手文と呼ばれる、直角に交差する線で構成される文様が生まれます。さらに弥生時代から古墳時代に移行する時期には、原単位図形と呼ばれる図形を組み合わせて作られた原単位文が出現し、近畿地方を中心に東海・北陸地方まで広がりました。このような流れを経て、直弧文というデザイン性に富んだ文様が誕生します。



1. 弧文板 福井市糞置遺跡出土

直弧文は、斜め十字に組み合わされた帯の交差した部分を中心にめぐる帯を基に、巻き込まれる他の帯から構成される、立体的で複雑な構図を持っています。紫金山古墳(大阪府茨木市)から出土した、スイジガイの形をモチーフにデザインされた貝輪が直弧文の起源とされ、後さまざまなお手本となつたと言われています。

直弧文が施される対象物の中でも主要なものには、装飾古墳や鹿角製刀剣装具、形象埴輪があります。鹿角製刀装具については、その伝播とともに直弧文の形と思想が各地に伝えられた可能性が指摘されています。福井県内では二本松山古墳から鹿角製装具が出土しており、立体的な浮彫で直弧文が表現されているのが特徴です。

古代の日本においては、魂を結び鎮める方法の一つとして、結び留めた紐の呪力が信じられていました。直弧文は単なる装飾ではなく、魂を結び鎮める意味を込めて紐帶の結び留めの形をもとにデザインされたものなのかもしれません。



2. 鹿角製装具(部分)

永平寺町二本松山古墳出土

(東京国立博物館所蔵 Image : TNM  
Image Archives)



3. 鹿角製装具残欠(束頭)(部分)

永平寺町二本松山古墳出土

(東京国立博物館所蔵 Image : TNM Image  
Archives)

## ② 古代の瓦塔と文字

宝亀元年(770)、称徳天皇によって百万塔(百万基の木造三重小塔)が完成し、諸大寺に安置されました。以降9世紀代にかけて、木造塔を意識し、ディテールを模倣して造られた瓦製の塔「瓦塔」が各地で多く製作されるようになります。福井県では、柿原熊ノ子窯跡(あわら市)で瓦塔もしくは木製小塔に乗せるために造られた須恵質の相輪の部品がほぼ一揃い見つかりました。相輪はひび割れや欠損などがみられることから失敗品とみられ、製作時期は、窯の操業年代より8世紀後半から9世紀前半におさると考えられます。こうした須恵質相輪の出土例は県内では初めてのことであり、古代の坂井郡の範囲で相輪が出土した初めての事例です。



4. 須恵質相輪 あわら市柿原熊ノ子窯跡出土

柿原熊ノ子窯跡出土相輪のデザインに注目してみましょう。

水煙(すいえん)の炎部は一般的に、4枚の板状の羽がつけられます。一方、柿原熊ノ子窯跡出土相輪の水煙は、粘土ひもで透かしと4つの炎部をつくり、立体的に表現しています。炎部の形状から、菖蒲沢窯跡(長野県塩尻市)や薬師寺東塔(奈良県奈良市)のような水煙を目指して製作された可能性が指摘できます。

請花(うけばな)には、これも立体的な花弁が取り付いていますが、請花に花弁を伴う例は全国的にも少なく、瓦塔では札馬窯跡(兵庫県加古川市)出土例などが類例として挙げられます。また花弁の立体的な形状あまり類例がなく、非常に個性的です。

擦管には、斜線のヘラ記号が刻まれています。通し番号とみられ、上から順(降順)に振られていたと考えられます。當麻寺西塔(奈良県葛城市)の宝輪にも同様の例がみられますが、こちらは下から順番(昇順)に漢字が刻まれるという違いがあります。

模倣とオリジナリティを掛け合わせて生み出された須恵質相輪を、ぜひ間近でご覧ください。

柿原熊ノ子窯跡では須恵質相輪のほかにも多種多様な須恵器(窯窯で焼かれた灰色の固い土器)が大量に出土しました。中には、金属製の仏器を模倣したものも見つかっています。その内の一つである稜椀には、金属器を強く意識して作ったものがある一方で、金属器の特徴を一部失ったものもみられ



5. 相輪復元図



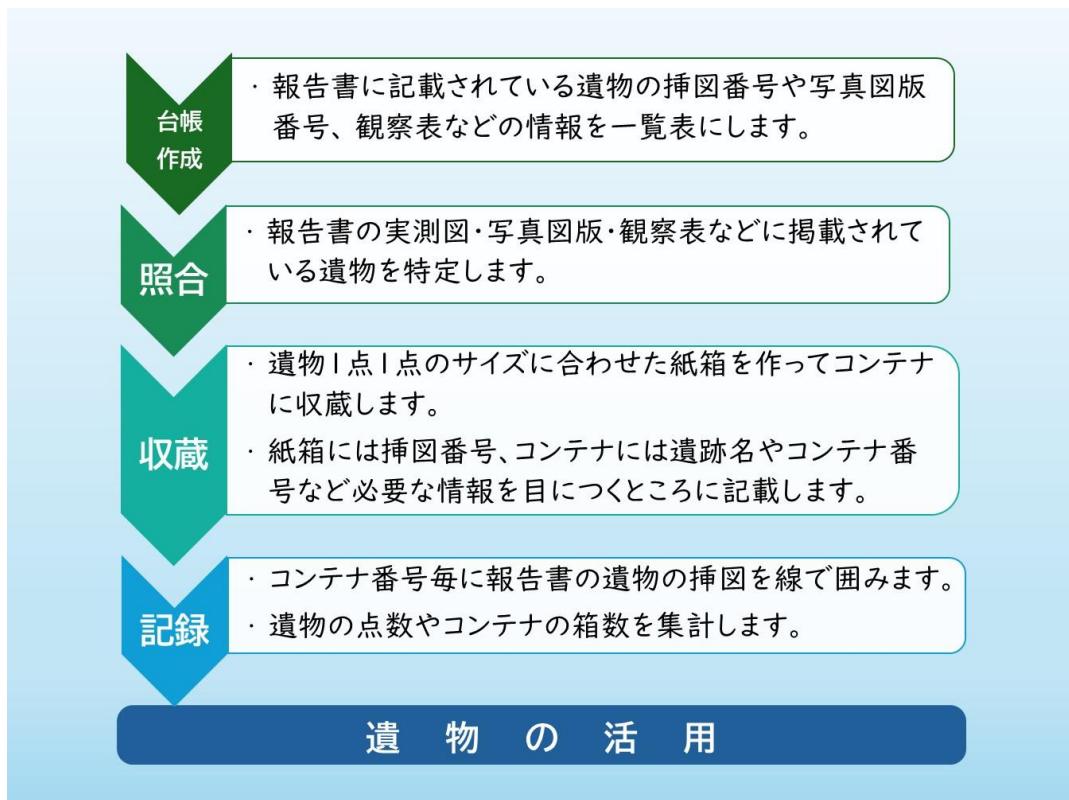
6. 稜椀 あわら市柿原熊ノ子窯跡

ます。同様の稜椀は、柿原熊ノ子窯跡を含む金津西窯跡群よりおよそ2km北東に位置する細呂木阪東山遺跡(あわら市)でも見つかっています。

細呂木阪東山遺跡では、ほかにも多量の墨書き須恵器が出土しており、中には何らかの湾港施設の存在をうかがわせる「津家」と墨書きされたものもあります。細呂木阪東山遺跡は金津西窯跡群で焼かれた須恵器の集積地であると考えられ、そこから北潟湖を通じて日本海へ運んでいた可能性が指摘できます。古代の人々が遺した文字資料は、遺跡の性格をうかがい知ることができます。展示では、細呂木阪東山遺跡の墨書き須恵器の一部を展示いたします。

### ③令和6年度 再整理事業成果展

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターでは、令和6年度より文化庁の国庫補助(地域の特色ある埋蔵文化財活用事業)を受けて、発掘調査で出土した遺物の台帳作成と再整理を進めています。今後出土する遺物も追加できるように、遺物台帳のデジタル化で管理を円滑に行いながら、遺物の活用を目指します。既刊の発掘調査報告書すべてを対象として、職員がグループとなり作業を進めます。遺物を照合の上、収蔵先を容易に特定できるよう台帳データやラベル等を作成して収蔵し直します。



### 7. 再整理の流れ



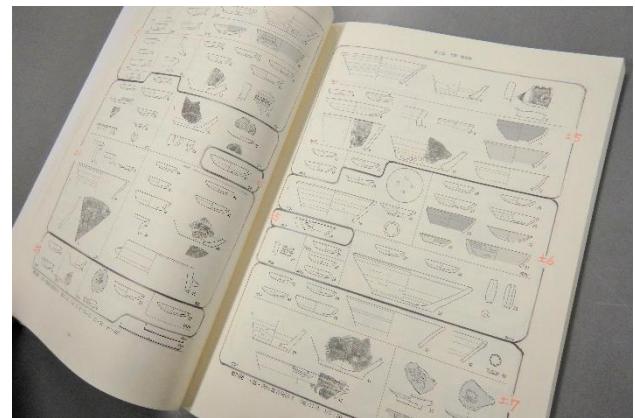
8. 台帳作成



9. 照合



10. 収藏



11. 記録

一万年近くに及ぶ福井県域の歴史をさらに「発掘」し、県内外の多くの方々に福井県の埋蔵文化財や出土品の魅力を発信するための、基礎をつくります。

今回は再整理が完了した24遺跡の内、曾万布遺跡および諏訪間興行寺遺跡の2遺跡について取り上げ、遺跡の概要と出土遺物の一部をご紹介いたします。

## 1. 曽万布遺跡

曾万布遺跡は、福井市曾万布町に所在し、足羽川右岸の自然堤防上に立地しています。北陸自動車道建設事業にともない、昭和47年(1972)8~9月、同年10~12月、昭和48年(1973)3~10月の3次にかけて発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、縄文時代の遺構や遺物のほか、古墳時代の竪穴住居や溝、室町時代の掘立柱建物や道路遺構、多数の土坑などが見つかりました。古墳時代の自然流路の跡からは、南岸沿いに護岸施設とみられる石積と水の流れを制御するための木組を組み合わせた遺構が遺されていました。古墳時代の大溝や自然流路からは、容器や農具、工具、建築部材など81点もの木製品が出土しており、中には貴重な資料も多くあります。

遺構が最も多く検出された室町時代には、越前焼や珠洲焼、瀬戸・美濃焼、東播磨系陶器、伊



12. 曽万布遺跡 遠景



13. 10号土坑遺物出土状況

万里焼、唐津焼、中国製陶磁器などの陶磁器

片や漆器、曲物、砥石などの石製品が出土しました。10号土坑埋土の下層からは一面に「あらきの在所川一へ」(宛名)、他面に「安丸国方政所」(差出人名)と墨書された木簡が見つかっています。足羽川南岸の安丸国方政所から北岸の「あらき」(福井市荒木町)の在所の「川一」という人物に送られた荷物の付札とみられます。



14. 10号土坑出土木簡(左:表・右:裏)

福井市曾万布遺跡

## 2. 諏訪間興行寺遺跡

諏訪間興行寺遺跡は、吉田郡永平寺町に所在します。福井市方面から曹洞宗大本山永平寺への主たる参道として、吉田郡松岡町と永平寺町を結ぶ越坂峠がありました。その永平寺町側の山裾に遺跡は位置しています。

のちに中部縦貫道の一部に組み込まれる国道416号線の改良工事に伴う調査として、平成元年(1989)から平成3年(1991)3月にかけて、越坂トンネルの坑口一帯の発掘調査が行われました。

遺跡の時期はⅠ～Ⅳ期に分けられ、Ⅲ期(15世紀前葉～中葉)とⅣ期(15世紀後葉～16世紀初頭)の遺構は、興行寺(本願寺五世綽如上人三男 周覚上人開基。現在の荒川興行寺)と関連するものと考えられます。Ⅲ期の建物付近やⅣ期の造成土には多量の炭化物が含まれており、出土遺物を検討した結果、2度火災が生じた可能性があります。

出土遺物はⅠ～Ⅳ期のそれぞれの時期によって様相が変化します。第Ⅲ期の生活面からは最も多くの遺物が出土しており、中でも火災に伴って廃棄された遺物は、同時期に利用されていたことが確実であることから、非常に良好な一括資料といえます。

今回の展示では、火災によって形成された炭化物層から出土した青磁碗などの陶磁器類をはじめ、職人が数珠の加工をする際に軸受けとして使用した可能性のある球状石製品などといった資料をお披露目します。



15. 諏訪間興行寺遺跡 遠景



16. 炭化物堆積面検出状況



17. 第Ⅲ期炭化物層出土青磁碗 諏訪間興行寺遺跡



18. 球状石製品 諏訪間興行寺遺跡